

# 『二入四行論長卷子』(擬) 研究覚え書

田 中 良 昭

まえがき

中国禅宗は菩提達摩の西来をルーツとし、その菩提達摩の思想禅法を伝える唯一のものが「二入四行」である、というのが今日学会の定説とされている。

ところで、この菩提達摩の親説とされる「二入四行」を含む長卷子(『二入四行論長卷子』(擬)の呼称を用いる)が、敦煌文献中に発見されてから半世紀近い歳月が過ぎ、既にその校註及び現代語訳までが公にされるに至ったことは、学会の慶事であり、先学の努力を多としなければならぬ。しかしながらそれでもってこの文献に対する研究が完了したわけではない。

私もこの文献についてはかねてから深い関心を抱き、昭和四〇年代にこの文献に関する三種の小論を発表した。すなわち、

(一) 「四行論長卷子と菩提達摩論」(『印度学仏教学研究』一四卷一号、昭和四〇年十二月) 二一七—二二〇頁。

(二) 「四行論長卷子雑録の一異本」(『宗学研究』一三号、昭和四六年三月) 三五—四一頁。

(三) 「菩提達摩に関する敦煌写本三種について」(『駒沢大学仏教学研究紀要』三一号、昭和四八年三月) 一六一—一七九頁。

である。これらの小論は、いずれも東洋文庫所蔵の敦煌文献のマイクロフィルムの調査、及び昭和四七年に実施したヨーロッパでの敦煌文献の実地調査によって、新たに知ることのできた『二入四行論長卷子』(擬)の異本の紹介と若干の考察を主とするものであり、きわめて断片的なものである。

ところが近年、この文献について、紙背文書である「永徽職員令」について考究された唐代史の分野から、更には禅のチベットへの流入と禅籍のチベット訳の問題を考究されたチ

ベツト学の分野から、新たな考察が加えられ、その成果が陸續として発表されているのである。すなわちこの文献は、単に禅宗初祖とされる菩提達摩の思想禅法を伝える中国禅宗史研究の一資料というに止まらず、他の研究領域からも高い学問的関心の寄せられている極めて貴重な資料なのである。こうしたこの文献に対する新たな学問的関心に資するためにも、このあたりで従来私が断片的に発表してきた諸論を整理総合し、あわせて多方面からの新たな研究成果を要約紹介しておくことが必要ではないか、というのが本小論の意図するところである。

従って本小論は、私自身の『二入四行論長卷子』(擬) 研究の総括と各方面から提示されたその後の成果を集約した「覚え書」にすぎないものであり、それ故に既発表の論文との重複の多いことをおこわりしておきたい。

## 一 序

『二入四行論長卷子』(擬) というのは、『二入四行論』を首とする一万余字からなる敦煌出土の長卷子本のこと、鈴木大拙氏は後述する朝鮮刊本『禅門撮要』中の『菩提達摩四行論』の標題に因んで、この長卷子本に『四行論長卷子』という擬題を付された。<sup>(1)</sup>『二入四行論』のみは、別に『続高僧伝』巻一六の菩提達摩伝、<sup>(2)</sup>『楞伽師資記』の菩提達摩伝、<sup>(3)</sup>『景

徳伝燈録』巻三〇の銘記箴歌を列記した中に曇林の序と共に掲げられ、『少室六門』にも『二種入』として別立されているが、<sup>(4)</sup>『二入四行論』を首とする長卷子すなわち『四行論長卷子』は、鈴木氏が昭和九年に北京図書館で北京本宿九九を発見し、翌昭和一〇年これを『燉煌出土少室逸書』に影印として収録し、<sup>(5)</sup>更にこれを朝鮮刊本『禅門撮要』中の『菩提達摩四行論』と対校して、昭和十一年『校刊少室逸書及解説』に発表されたものである。<sup>(6)</sup>鈴木氏は同年、大英博物館でこの『四行論長卷子』の一異本、すなわちスタイン本S二七一五を発見され、先の二本と対校し、昭和二十四年『禅思想史研究第二』に発表された。<sup>(7)</sup>これは昭和四三年『鈴木大拙全集』巻二として改訂出版されている。<sup>(8)</sup>尚、翌昭和四四年、柳田聖山氏は、筑摩書房の「禅の語録」シリーズの1として、この『四行論長卷子』の訳註をされたが、その標題は『達摩の語録』(『二入四行論』)とされ、長卷子のすべてを『二入四行論』の名で呼ばれている。しかし今は『続高僧伝』等に別立された文字通りの『二入四行論』をこの名で呼び、長卷子全体については、これを『二入四行論長卷子』(擬)とし、ここではその略称として、鈴木氏による『四行論長卷子』という擬題を用いることにしたい。

以上鈴木氏によって紹介された三本の内、北京本宿九九、S二七一五は、共に首部を欠き、朝鮮刊本は「菩提達摩四行

論」という標題を持ちながら、最初の曇林序と、末尾の諸禪師の言葉、すなわち鈴木氏が雑録第二と呼ばれる部分が含まれていないために、『四行論長卷子』本来の題名は知られず、僅かにS二七一五の末尾に、「論一卷」という尾題とおぼしきものが知られるにすぎなかった。

ところが、その後の調査の結果、更にスタイン本にS三三七五、パリ国民図書館所蔵のペリオ本にP三〇一八、P四六三四の都合三本が、共に『四行論長卷子』の異本であることが判明した。これら新出の三種は、いずれも中間部分の断片にすぎず、その内容もS三三七五は一節(一段)<sup>10</sup>の弟子曇林の序の末尾から、二入四行とそれに続く一〇節(四段)の中途まで、P四六三四は、三種に区分され、複雑な様相を呈するが、雑録第一の五二節(三六段)から雑録第二の八九節(六二段)の中途までがあり、これらの二種は、いずれも従来のものとはほぼ完全に一致する。しかるに、P三〇一八のみは、内容上かなりの出入があり、また型態上からも『四行論長卷子』の雑録第一の四五節(三一段)から雑録第二の九二節(六五段)に相当する部分が、二種の修道論と悟境を述べた偈文の間に書き記され、それに「菩提達摩論」という標題がつけられていること等、他のものとは著しくその趣を異にしているのである。そこでまずこのP三〇一八を中心にして考察してみよう。

## 二 『二入四行論長卷子』(擬)と『菩提達摩論』

### ——P三〇一八写本考——

一般に達摩の弟子曇林の伝えた達摩論、すなわち『二入四行論』の他に、偽造の達摩論を含めて、かなり多くの達摩論が唐代に行われていたことが知られているが、その中にあって、『菩提達摩論』という名の一本が、既に古く我国に将来されていたことが注目される。すなわち八四七年の記録である『惠雲律師将来教法目錄』には、

#### 「菩提達摩論 一卷」

とあり、惠運律師によって将来されていたことが知られる。今日この『菩提達摩論』は散佚してしまい、その内容を窺うことはできないが、達摩論の一つとして『菩提達摩論』一卷の存在していたことがこの記載によって明らかになったのである。

ところで、今問題のP三〇一八にある『菩提達摩論』というのは、『四行論長卷子』の雑録第一の四五節(三一段)から雑録第二の九二節(六五段)に至る一三六行にわたる長文であるが、何故に四五節(三一段)から書き出されたものか、また何故に九二節(六五段)で打ち切られたものか、ということが問題になる。すなわちこの筆写子が、既に行われていた『四行論長卷子』のこの部分のみを抜粋して、それに

「菩提達摩論」という標題を付けたものか、或いは我国に將來された『菩提達摩論』一卷とも関連して、「菩提達摩論」なる標題のもとに、このP三〇一八に筆写されているものがそのまま行われていたものか、或いはまた、このP三〇一八には『四行論長卷子』の四五節（三一段）から九二節（六五段）に相当する本文のみが筆写されていたのを、後人が実はそれが『四行論長卷子』すなわち『菩提達摩論』の一部であることを知り、後で題名のみを補ったものか、「菩提達摩論」という標題は、「修道去云々」の偈文の最後の行の余白に記されている。もしそうだとすると、『四行論長卷子』は、元來『菩提達摩論』という標題のものであったことになり、S二七二五の末尾に「論一卷」という尾題のあるのは、「菩提達摩論一卷」の意味に解せられることになる。因みに鈴木氏は、この「論一卷」の尾題を、朝鮮刊本の標題である「菩提達摩四行論」に対応するものであろうかと推論されている<sup>(12)</sup>。

次にP三〇一八が他の諸本と異なる特色は、いわゆる雑録第二の最初である六八節（三一段）の首部についてである。特にこれが従来種々の異説を生ずる大きな原因となっていたことと考え合わせると、P三〇一八の資料的価値は極めて大きいといわねばならない。それは、雑録第二の最初の六八節（三一段）の首部に、「法師曰」とあるのを、このP三〇一八のみが、「縁法師曰」といって、明白に縁法師の言葉とし

たことである。従来この部分が、ただ単に「法師曰」といって、はたして誰の言葉であるのか不明であったために、字井伯寿氏は、

最初の法師は、或は達摩を指すか<sup>(13)</sup>。

といわれ、鈴木氏も、

二入四行説の序文に『法師者西域南天竺国……』と始められて居るところから推して、此処の『法師』も達摩大師を指すのではなからうか<sup>(14)</sup>。

と推論されていたものである。従って朝鮮刊本が、『四行論長卷子』の雑録第二の部分を削除したものであるという仮定についても、関口真大氏が、

雑録第二の最初にある四問答即ち第六八節から第七一節までは、単に「法師曰」とあり、その法師とは、達摩大師に外ならないと見られていたことになるわけであるから、この部分までも切り捨ててしまった理由が全く了解し難いものになる<sup>(15)</sup>。

として疑問を呈されていたものである。しかしこの「法師曰」が達摩大師の言ではなく、縁法師のものとなると、あるいは朝鮮刊本に対するこの仮定が成り立つことになるかも知れない。すなわちこれによって、雑録第二とされる部分は、すべて達摩大師以外の諸師の言となるからである。というのは、「法師曰」以下の四問答がすべて縁法師の言ということ

になると、雑録第二の六八節(五〇段)から八〇節(五六段)までは、すべて縁法師の言となり、それに続く八一節(五七段)以下九〇節(六三段)までは、可師すなわち慧可の言となるのである。かくして雑録第二の部分は、すべて達摩大師のものではないことがこれによって明らかになったのである。

それでは雑録第一の部分についてはどうであろうか。これについては、かの『少室六門』中の『安心法門』との関係がまず問題になる。『安心法門』が雑録第一の抜粋であると思われることは、既に指摘されていることであり、その最初は、『四行論長卷子』に「三藏法師言」として引用されている一文でもって始まっている。この『安心法門』が、永明延寿(九〇四—九七六)の『宗鏡録』(九六一)巻九七では、達摩大師のものとして、全文が引用されており、<sup>(17)</sup>その他にも、『宗鏡録』巻一二の「初祖大師云」の引文が、共に同じく延寿によって引用された『安心法門』からのものであることからして、延寿の頃には、『安心法門』を達摩大師のものと考え、従って『安心法門』の素材とされるところの『四行論長卷子』雑録第一のある部分も、同様に達摩大師のものと考えられていたことになる。

しかしながら、この延寿の『宗鏡録』をさかのぼる百丈懐海(七二〇—八一四)の『百丈大智禪師広語』(『古尊宿語録』

巻一及び巻二所収)の中には、「此土初祖云、」としての引文が三ヶ所になされており、<sup>(20)</sup>その内、後の二つの引文は、雑録第一の二五節(一七段)と二八節(一八段)、五三節(三七段)の中に見出されることが、既に指摘されている。<sup>(21)</sup>しかもこれらは、いずれも『安心法門』とは無関係であって、百丈の頃、既に『安心法門』以外の雑録第一のある部分もまた達摩のものとしていたことが知られるのである。

『安心法門』が達摩のものという延寿の立場に立つと、当然『安心法門』が最初に引用した「三藏法師言、」の三藏法師とは、達摩大師のことになるわけであるが、達摩大師を三藏法師と呼ぶ例は、『楞伽師資記』に「第二魏朝三藏法師菩提達摩」といい、<sup>(22)</sup>『唐中岳沙門積法如禪師行狀碑』には「南天竺三藏法師菩提達摩」とあり、<sup>(23)</sup>またP二〇四五の『絶観論』の標題は、「三藏法師菩提達摩絶観論」とされているのであって、<sup>(24)</sup>雑録第一にいう三藏法師を達摩大師とすることも当然考えられる。そしてこの立場から、鈴木氏は、雑録第一の部分を達摩大師の語録であるとされたのである。<sup>(25)</sup>一方宇井氏は、この三藏法師を達摩大師とすることによって、かえって「三藏法師言」以外の部分は、達摩の言ではないという見解をとられ、雑録第一の直前にある一節(四段)の向居士の慧可への書簡とも関連して、雑録第一を慧可の言を録したものとされた。<sup>(26)</sup>更に中川孝氏は、雑録第一を慧可所述とする

宇井説に賛同され、その根拠として、曇林所伝の達摩の『二入四行論』に続く九節(三段)の序文の如きものは、その中の「始知六年、徒勞苦行。」の一句によって、慧可が自らの経歴を叙述したもの、一〇節(四段)の偈の如きものは、九節(三段)にいう『入道方便偈』、一一節(四段)の向居士の慧可への書簡と伝えられているものは、逆に向居士に対する慧可の返信である、従って九節(三段)以下雜録第一のすべては、これ慧可所述のものである、という新説を出されたのである。<sup>(27)</sup>

しかしながら一一節(四段)の書簡は、向居士の慧可への書簡であることは、既に『統高僧伝』卷一六の積僧可伝に「有<sub>二</sub>向居士者<sub>一</sub>……(中略)……致<sub>レ</sub>書通<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>」として示されていることよって明らかであり、更に延寿の『宗鏡録』卷三二にも、「向居士云、」として『四行論長卷子』並びに『統高僧伝』卷一六積僧可伝と同一の向居士の言が引用されていることによっても、これが向居士のものであることは疑う余地がないと考えられる。ただ『四行論長卷子』と『統高僧伝』の末尾が、前者は「未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>造談<sub>一</sub>、聊申<sub>二</sub>此句<sub>一</sub>、詎論<sub>二</sub>玄旨<sub>一</sub>。」といい、後者は「未<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>造談<sub>一</sub>、聊申<sub>二</sub>此意<sub>一</sub>、想為<sub>レ</sub>答<sub>レ</sub>之。」といているのに対し、『宗鏡録』では、「故知、但了<sub>二</sub>一心<sub>一</sub>、則方法皆寂。」という延寿自身の著語とみられるものが記されている。いずれにせよこの一一節(四段)は向居士

のものであり、これを慧可のものとすることはできない。更に九節(三段)の序文の如きものの中の「始知六年、徒勞苦行。」の一句は、関口氏も反論されているように、<sup>(30)</sup>慧可が達摩への従学について述べたものとするには無理があるように思われる。むしろこれを「ブツダが六年間の苦行の無意味なことを知り、瞑想に入ったのを指す。」とされた柳田説をより妥当とすべきであろう。<sup>(31)</sup>こうしてみると、九節(三段)以下雜録第一を含めたすべてを慧可のものとする中川説にも難点があるのである。

次に問題となるのは、雜録第一の一三節(六段)、一四節(六段)と関連する『大乘入道安心法』との関係である。既に関口氏の論考にもある通り、<sup>(32)</sup>この『大乘入道安心法』は『宗鏡録』卷九九に引用されている。<sup>(33)</sup>ただ関口氏は、この『大乘入道安心法』の引用に先立つ「又積法聰、因聽<sub>二</sub>慧敏法師說法<sub>一</sub>、得<sub>二</sub>自於<sub>レ</sub>心蕩然無累<sub>一</sub>、乃至見<sub>二</sub>一切境<sub>一</sub>、亦復如<sub>レ</sub>是。若不<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>心、尽隨<sub>レ</sub>物轉。是故大乘入道安心法云、云々。」の文でもって、『大乘入道安心法』を直ちに法聰のものとしていっているが、実際は、これが法聰のものではなくて、延寿が慧敏と法聰との因縁を説くために、当時別に存在していた『大乘入道安心法』を引用したものであろう。この点柳田氏も既にP三五五九の『大乘安心入道法』についての論述の中で、これを法聰のものとすることに疑義を挟まれている。<sup>(34)</sup>ただ柳

田氏が、同じ編者すなわち延寿の別著である『心賦注』では、法聰とは無関係にこの『大乘入道安心法』が引用されていることを述べられているが、実は『宗鏡録』巻九九と『心賦注』巻四の引用はまったく同一内容であり、<sup>(35)</sup>共に法聰との関係の上で引用されているのである。

以上の如く、雑録第一は極めて問題が多く、現存の資料のみでその撰者を早急に結論づけることはできない。それに先立つ九節（三段）、一〇節（四段）と共に、更に今後の検討を待たねばならないと考えられる。

ただP三〇一八の出現によって、雑録第二は、すべて達摩大師のものではないということ、更に雑録第一、第二を含めて、そのある部分が、『菩提達摩論』の標題のもとに行われていたということが明らかになったのである。

### 三 『二入四行論長卷子』（擬）の雑録を補う

#### 新資料（I）

#### (一) P二九二三写本の本文

従来知られていた『四行論長卷子』は、一〇一節（七四段）の覚禪師のことばで完了し、S二七一五の末尾には、「論一卷」の尾題がつけられ、北京本宿九九の末尾には、  
五言詩一首贈上。写書今日了、因何不送錢、誰家無頼

漢、廻面不相看。

というらくがきがつけられている。従って昭和四四年に出版された柳田氏訳註の禪の語録シリーズの1『達摩の語録』「二入四行論」も、当然のことながら雑録第二の一〇一節（七四段）で完了の形をとっているのである。

しかしながら、その後竜谷大学の井ノ口泰淳氏が撮影将来されたペリオ本の内、P二九二三に『四行論長卷子』の雑録部分に関する新たな異本の存在が知られるに至った。この写本については、昭和四五年夏、花園大学における第二一回日本印度学仏教学会で、柳田氏が関説し、その存在を報告されたものであるが、ここにあらためてその本文を紹介し、その内容について検討を加えることにしたい。

さて、このP二九二三は、全六紙一二〇行からなり、首尾を欠くが、一行平均二七字で、非常に整った書体である。その内容は雑録第一の六六節（四八段）の中途から始まり、従来『四行論長卷子』一卷の末尾とみられていた雑録第二の一〇一節（七四段）の覚禪師の言葉で終ることなく、更に続いて梵禪師、道志師、円寂尼、監禪師、因禪師、三蔵法師、忍禪師、可禪師、亮禪師、曇師、慧堯師、知禪師、志禪師という一三人の祖師の言葉が四三行にわたって記され、しかも最後の志禪師の言葉は、途中で断欠して尚完結していないのである。

今これら諸師の言葉に番号を付してみると、最後の志禪師は一一四節(八七段)となる。すなわち『四行論長卷子』は、従来、雜錄第二の一〇一節(七四段)覚禪師の言葉で完結するものとされていたが、この異本の出現によって、その後更に一三人の祖師の言葉が続き、それでも尚完結していない、という事実が判明したのである。以下煩をさけるために従来知られていたものと重複する部分、すなわち雜錄第一の六六節(四八節)の中途から、雜錄第二の一〇一節(七四段)までは、最初と最後の各一節を残して他を省略し、最後の一節の後、新たに追加された部分に番号を付してこれを示すことにしたい。

傍線は『宗鏡録』に引用された部分、『宗鏡録』との対校を脚註で示す。

六六(四八)(首欠)不改、故名為法性心。心无生无滅、名涅槃心。若作此解者、是妄想心顛倒、不了自心現境界、名為波浪心。

以下六七(四九)より一〇〇(七三)までは、従来のものと重複するため省略する。

一〇一(七四)覚禪師曰、若悟心無所屬、即得道迹。何以故、眼見一切色、眼不

曰は云

屬一切色、是自性解脫。耳聞一切声、耳不屬一切声、乃至、意經歴一切經、意不屬一切法、即是自性解脫。

「乃至」以下の傍点部分はP二九二三のみにあり。ここでS二七一五のみ「論一卷」の尾題あり。北京本には「五言詩一首贈上」として写字生のらくがきあり。以下新出のP二九二三のみにある部分。

經云、一切法不相屬故。

一〇二(七五)梵禪師曰、若知一切法皆是一法、即得解脫。眼是法、色亦是法、法不与法作繫縛。耳是法、声亦是法、法不与法作解脫。意是法、境界是法、法不与法作罪、法不与法作福、自然解脫。經云、不見法還与法作繫縛、亦不見法還与法作解脫。

一〇三(七六)道志師曰、一切法無碍。何以故、一切法無定、即是無碍。

一〇四(七七)円寂尼曰、一切法無对、即是自性解脫。何以故、眼見色時無不見、乃至意識知時無不知。無知乃至惑時無解、解時無惑。夢時無覺、覺時無夢。故經云、大衆見阿闍仏後、更不見

故の次に心与一切法各不相知の九字あり

曰は云

一の一字なし亦の一字なし

曰は云  
法の次に唯心の二字あり



仏。阿難、一切法不<sub>レ</sub>与<sub>二</sub>眼耳<sub>一</sub>作<sub>レ</sub>対。何以<sub>レ</sub>故、法不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>法、法不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>法。又經云、不<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>色生<sub>レ</sub>識、是名<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>色。

耳の一字なし

一〇五(七八) 監禪師曰、明無<sub>二</sub>淨穢<sub>一</sub>、闇不<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>心。心不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>法、謂<sub>二</sub>法縛<sub>レ</sub>我。然諸法

体無<sub>レ</sub>縛無<sub>レ</sub>解。若衆生自識時、情不<sub>レ</sub>動亦<sub>レ</sub>涅槃。不<sub>レ</sub>解時、動亦非<sub>二</sub>涅槃<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>動亦非<sub>二</sub>涅槃。未<sub>レ</sub>識時、於<sub>二</sub>已自心<sub>一</sub>妄計<sub>二</sub>動靜<sub>一</sub>。解

時、自尚不<sub>レ</sub>有、誰能計<sub>二</sub>動靜<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>解時、說<sub>二</sub>諸法不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>解<sub>一</sub>、解時、無<sub>二</sub>法可<sub>レ</sub>解<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>解時惑、解時無<sub>二</sub>惑可<sub>レ</sub>惑<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>解可<sub>レ</sub>解<sub>一</sub>。無<sub>二</sub>惑可<sub>レ</sub>惑者故名<sub>二</sub>大解<sub>一</sub>。

一〇六(七九) 因禪師曰。諸家說<sub>二</sub>六識是妄想<sub>一</sub>、名作<sub>二</sub>魔事<sub>一</sub>。

一〇七(八〇) 三藏法師說、妄起時無<sub>レ</sub>起、即是<sub>二</sub>仏家法<sub>一</sub>。從<sub>レ</sub>忘<sub>二</sub>取捨<sub>一</sub>、乃至<sub>二</sub>眞如平等<sub>一</sub>、入<sub>二</sub>菩薩心中<sub>一</sub>、皆同一法性。然惑人說<sub>二</sub>六識造<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>。

三藏法師問、汝六識依<sub>レ</sub>何而起。惑者答言、從<sub>二</sub>空幻<sub>一</sub>起。

三藏法師云、虛幻無<sub>レ</sub>法、云何造<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>。答、諸法雖<sub>レ</sub>空、緣合即有。識者成<sub>レ</sub>聖、而迷者是愚。愚故受<sub>レ</sub>苦、那得<sub>レ</sub>論<sub>二</sub>無空<sub>一</sub>却諸法<sub>一</sub>。

『二入四行論長卷子』(擬) 研究覺え書(田 中)

三藏法師答、汝用<sub>レ</sub>功來至<sub>二</sub>仏地<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>六識是煩惱<sub>一</sub>、若功夫至<sub>二</sub>仏地<sub>一</sub>時、六識是得道処。經云、不<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>煩惱大海<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>無価宝珠<sub>一</sub>。又衆生之類是菩薩仏土、驗<sub>二</sub>此六識<sub>一</sub>即究竟果処。而惑者終日作<sub>二</sub>迷解<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>即迷非<sub>レ</sub>迷。就<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>而言、無<sub>レ</sub>解無<sub>レ</sub>迷、何所<sub>レ</sub>患乎。

一〇八(八一) 忍禪師意、自識<sub>二</sub>心理<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>深無<sub>レ</sub>淺、動靜合<sub>レ</sub>道、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>得失之地。而惑者迷<sub>レ</sub>空迷<sub>レ</sub>有、強生<sub>二</sub>垢見<sub>一</sub>、將<sub>レ</sub>心除<sub>レ</sub>心、謂<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>煩惱可<sub>レ</sub>斷<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>此者即永溺<sub>二</sub>苦海<sub>一</sub>、常受<sub>二</sub>生死<sub>一</sub>。

一〇九(八二) 可禪師曰、凡夫不<sub>レ</sub>解故、謂<sub>二</sub>古異<sub>一</sub>今、謂<sub>二</sub>今異<sub>一</sub>古、復謂<sub>二</sub>離<sub>二</sub>四大<sub>一</sub>更有<sub>二</sub>法身<sub>一</sub>。解時即今五陰是<sub>二</sub>円淨涅槃<sub>一</sub>、此身心具<sub>二</sub>足万行<sub>一</sub>、正称<sub>二</sub>大宗<sub>一</sub>。若如<sub>レ</sub>斯解者、見<sub>二</sub>煩惱海中明淨宝珠<sub>一</sub>、能照<sub>二</sub>一切衆生冥朗<sub>一</sub>矣。

P 二九二三は傍点の謂は於なり。『宗鏡録』にて改む。

一一〇(八三) 亮禪師曰、明<sub>二</sub>諸法道理<sub>一</sub>、実無<sub>二</sub>同異<sub>一</sub>。就<sub>二</sub>隱顯<sub>一</sub>而言、有<sub>二</sub>卷舒<sub>一</sub>二意。卷義者、不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>心起<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>觀<sub>二</sub>解行<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>情施為<sub>一</sub>、性住<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>。舒義者、心舒屬<sub>レ</sub>他。為<sub>二</sub>

可禪師曰は第二祖可大師云不解故の三字なし

五陰の次に心の一字あり

名利<sub>二</sub>所<sub>二</sub>使因果<sub>一</sub>、所<sub>二</sub>撰是非<sub>一</sub>、自纏不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>自在<sub>一</sub>、名為<sub>二</sub>舒義<sub>一</sub>。

一一一(八四)曇師曰、所謂諸法者五陰、是性本来清淨。故仏説、世間は出世間、衆生迷<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>故、自謂<sub>レ</sub>住<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>。解時世間出世間、雖<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>空名<sub>一</sub>、実無<sub>二</sub>世間出世間可<sub>レ</sub>得<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>此解者、此人識<sub>二</sub>五陰義<sub>一</sub>。

一二二(八五)慧堯師曰、明<sub>二</sub>了心識<sub>一</sub>、性自体真。所縁念処、無<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>仏法<sub>一</sub>。涅槃心慮<sub>二</sub>万境<sub>一</sub>。胡語名<sub>レ</sub>仏、漢名<sub>二</sub>覺者<sub>一</sub>。覺者は心、非<sub>二</sub>不覺心<sub>一</sub>。心之与<sub>レ</sub>覺如<sub>二</sub>眼目異名<sub>一</sub>。衆生不<sub>レ</sub>解、謂<sub>二</sub>心非<sub>一</sub>是<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>。將<sub>レ</sub>心逐<sub>レ</sub>心。若解時心即是<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>、仏即是<sub>二</sub>心<sub>一</sub>。故我説、衆生自性清淨心、從<sub>レ</sub>本已来無<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>。若心非<sub>二</sub>是<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>者、異<sub>レ</sub>心之外、更不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>將<sub>レ</sub>何物<sub>一</sub>名<sub>レ</sub>之為<sub>レ</sub>仏。

P 二九二三は傍点の無の次に無の一字あり。

一一三(八六)知禪師曰、凡聖二門、無始法爾爾。凡為<sub>二</sub>聖因<sub>一</sub>、聖為<sub>二</sub>凡果<sub>一</sub>。果報相感不<sub>レ</sub>過。若惡出<sub>二</sub>聖知<sub>一</sub>、惡出<sub>二</sub>愚惑<sub>一</sub>、經論成文非<sub>二</sub>下情能説<sub>一</sub>。經云、雖<sub>二</sub>無我<sub>一</sub>人善惡不。云、行<sub>二</sub>五戒<sub>一</sub>者得<sub>二</sub>人身<sub>一</sub>、行<sub>二</sub>十善<sub>一</sub>者定得<sub>二</sub>生天<sub>一</sub>。持<sub>二</sub>二百五十戒<sub>一</sub>觀<sub>レ</sub>空修<sub>レ</sub>道、得<sub>二</sub>阿羅

慧堯師曰は曉禪師云  
明の一字なし  
体の次に恒の一字あり

漢果。広作<sub>二</sub>諸非<sub>一</sub>、造<sub>レ</sub>過極惡、貪瞋放逸、唯得<sub>二</sub>三塗<sub>一</sub>此畢。然之數理無<sub>二</sub>差違<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>声響順真影端<sub>一</sub>。

一一四(八七)志禪師曰、一切法皆是<sub>二</sub>仏<sub>一</sub>。

P 二九二三以下断欠

(二) P 二九二三写本の内容

P 二九二三によって新たに知られた一三人の祖師の内、五人の言葉が、先にも考察した如く、北宋頭初に成立した永明延寿の『宗鏡録』中に引用されている。すなわち卷九七に梵禪師、円寂尼、可禪師、慧堯師、卷一〇〇に三蔵法師の都合五人であつて、<sup>(37)</sup>『四行論長卷子』の雜録第二全体としては、従来の蔵禪師、安禪師、覺禪師の三人を含めて、都合八人の祖師の言葉が引用されていることになり、延寿の頃には、P 二九二三の newly added part を含む『四行論長卷子』が一般に行われていたことが窺われる。

これら『宗鏡録』引用の五人の祖師の内、最初の梵禪師は必ずしも明白ではないが、あるいは三祖僧璨と同時代で、二祖慧可が鄴都で禅法を開演していた頃に、同じく鄴都に遊学したといふ隋の知梵(五三九―六一三)あたりを指すかと考えられる。<sup>(38)</sup>第二の円寂尼は、その人為のまったく不明な人である。第三の三蔵法師については、他の諸師の言葉が、すべて

『宗鏡録』卷九七の禅宗祖師のものからの引用であるのに対して、この三蔵法師の言葉のみは、卷一〇〇の禅宗以外の諸師の言葉からの引用であることから、かつてこれを玄奘三蔵あたりを指したのではないかと考えたのであるが、近年<sup>(39)</sup>沖本克己氏の「チベット訳『二入四行論』について」と題する論文で、チベット訳ではやはり達摩大師であることが指摘された。<sup>(40)</sup>『四行論長卷子』には、別に雑録第一の一五節（七段）に、「三蔵法師言」としての引用があるが、これは先に考察した如く、『宗鏡録』卷九七に、菩提達摩（此土初祖菩提達摩多羅）のものとして引用された『安心法門』の最初の部分で、この場合の三蔵法師は、達摩を指していったものであるが、今の三蔵法師もチベット訳では達摩とされているという。

ついで第四の可禪師は、『宗鏡録』には、「第二祖可大師云」として引用されていることからして、禅宗第二祖慧可禪師であることは明白である。可禪師の言葉とされるものは、別に雑録第二の八一節（五七段）から九〇節（六三段）までに存在することは、既に知られている通りである。

最後の慧堯師は、『宗鏡録』では堯禪師と呼ばれているが、これは『統高僧伝』卷一七の仙城慧命伝に付見する慧暁ではないかと考えられる。<sup>(41)</sup>仙城慧命（五三一—五六八）は、南嶽慧思と共に定業に移めた行解相應の禅者で、特にその著作

『詳玄賦』の伝注が、『詳玄伝』として『楞伽師資記』僧璨伝に引用されており、<sup>(42)</sup>初期禅宗とは密接な関係にあった人である。慧暁は、「文才慧命に亜ぐ」といわれているから、恐らくその言葉が、後世まで伝えられた人であろう。

以上は、『宗鏡録』に引用された諸師であるが、『宗鏡録』に引用されない諸師については、たとえば忍禪師が五祖弘忍を指すかとも考えられるが、その言葉は『楞伽師資記』弘忍伝や、『修心要論』等、現存の弘忍に関する資料に見当らず、従ってこれを直ちに弘忍に結びつけることはできないし、その他の諸師についても、その人為は不明である。ただ『宗鏡録』卷九七の末尾に一括して引用された諸師の言葉と、今新出の部分を含む『四行論長卷子』雑録第二の部分は、極めて密接な関係にあることからして、永明延寿は、恐らく『四行論長卷子』のより完全な型のものを知っていたのではないかと考えられる。

以上雑録第二とされる部分は、南北朝から隋代、更にせいぜい下っても初唐頃迄に活躍した禅者達の言葉を集めたものであることが窺われ、従って巻首の達摩の唯一の真説とされる『二入四行論』、それに続く古来問題の多い雑録第一と達摩以外の諸師の言葉を連ねた雑録第二を含めて、『四行論長卷子』一卷は、達摩を中心とした初期禅宗に属する人々の言葉を集大成した「初期禅宗語録」ということができると考えら

れる。

#### 四 『二入四行論長卷子』（擬）の雑録を補う

##### 新資料（Ⅱ）

— P 四七九五写本の本文とその内容 —

昭和四七年夏、パリ国民図書館にてペリオ本の实地調査に従事した際に、前項に紹介したP 二九二三、及びそれと同一系統の『四行論長卷子』雑録を補う新たな写本として、P 四七九五の存在を知ることができた。尚これについても、昭和四七年八月、パリ在住の柴田増実氏を通じて新たにペリオ本のマイクロフィルムを入手された柳田氏から、帰国後に、「ダルマ語録にP 四七九五を加え、『宗鏡録』との重複はこれで全部終り。」という内容のご教示をいただいている。かくして前項に示したP 二九二三に続くべき部分の一断片であるP 四七九五の出現にともない、その本文を紹介し、内容について若干の考察を試みようと思う。

まずP 四七九五写本の形態は、首尾を欠き、25.5×21cm（共に最長部分）の一紙一行の断片に過ぎず、紙は薄い褐黄色紙で油紙の裏打ちがあり、上部は全体にわたり、下部は後半部分に破損がある。書体はかなり整っており、一行平均二三字の断片である。以下その本文を示してみよう。

〔首欠〕

□□法眼。施為拳動皆是菩提。随心直至仏道。莫警莫□□皆□不。自心□□□即牙。若能安心処□卓住。不動互即是□。

汶禅師曰。苦諦有故不空。と諦无故不有。二諦二故不一。聖照□无二。

□禅師曰。一切経論惑人。无罪処見罪。解人罪処即无□。

縁法師曰。一切経論皆是起心法。若起道心即巧为生智余事。若心不起何用坐禅。巧偽不生何劳正念。若不発菩提□求慧解。事理俱尽。

朗禅師曰。心若起時即看使□。□着不見色。惑起見色作色解。心是色作法と看□。□云。一切法都是妄想計校。作是无有実□。所有□□□□心。道似何物而欲修之。煩惱似何物而欲断□。□□□□是道器。善知識。

〔尾欠〕

以上のように、この一本は、不明箇所や欠損部分も多く、決してよい写本とはいえないが、従来まったく知られなかった『四行論長卷子』尾部の一部を、この写本によって補うことが可能になったのである。

ところでこの五人の禅師、法師の言葉の内、延寿の『宗鏡録』に引用されているのは、最後の朗禅師の言葉のみである。先にP 二九二三の newly 出部分では、五人の禅師の言葉が

『宗鏡録』に引用されていることをみたのであるが、新出のP四七九五によって、更に一人を加え、都合六人の祖師の言葉の引用が明らかになった。すなわち『宗鏡録』巻九七に、

朗禪師云、凡有所見皆自心現。道似何物而欲修之。煩惱似何物而欲断之。<sup>(43)</sup>

とある内、後の二句がP四七九五の「朗禪師曰」中の言葉と一致している。

またこの朗禪師の前にある「縁法師曰」の縁法師は、従来知られていた雑録第二の六八節（五〇段）以下にみられる「縁法師曰」の縁法師と同一人物とみられ、七五節（五五段）と七六節（五五段）における縁法師の答の中に、それぞれ

若欲起道巧偽生。

不発菩提心不用経論智。<sup>(44)</sup>

といているのが、P四七九五では、

若起道心即巧爲生智余事。

若不発菩提□求慧解。

というのと内容的に極似している点が注目される。しかしそれ以外の禪師の言葉は、他に比すべきものは見出せない。

このように新出のP四七九五は、僅か一一行の、しかも破損の多い断片にすぎないが、前述のP二九二三と共に『二入四行論長卷子』雑録の尾部断欠部分を多少なりとも補い得た

という点で、貴重な資料といえることができよう。

## 五 『二入四行論長卷子』（擬）をめぐる諸問題

前項までの考察によって、『四行論長卷子』のテキストについては、まず鈴木氏による北京本宿九九、S二七一五の発見と朝鮮刊本『禪門撮要』所収の『菩提達摩四行論』との校定出版、その後私自身が東洋文庫で行った敦煌文献の写真調査によるS三三七五、P三〇一八、P四六三四の発見とその報告、如上の刊本一種、写本五種をふまえたテキストによる柳田氏の校定本とその訳註の出版、更に柳田氏及び私自身が行った調査の結果、従来知られなかった末尾を補う新たな写本P二九二三、P四七九五の発見と紹介が続き、こうして写本七種、刊本一種の都合八種の存在が知られるに至ったのである。

ところが、ロンドン大英博物館には、ジャイルズ氏によるスタイン蒐集敦煌出土漢文文献の目録に収録されていない未整理文献が、約四三〇〇点（S六九八一—S二二九七）も存在し、現在整理が継続され、一部整理の済んだものは、マイクロフィルムによって既に東洋文庫へも送られてきているのである。私が滞英中の昭和四七年六月、東洋写本部主任のネルソン氏及び担当の陸玉英氏のご配慮で、これら未整理文献の調査をさせていただき、その中にS七九六一の『大乘無生

方便門』残巻と共に、S七一九九に今問題の『四行論長卷子』の一異本を見出すことができた。<sup>(46)</sup>

このS七一九九写本は、首尾を欠き29×91.5cmの三紙五行からなり、一行平均三〇字、やや小さ目の整った書体で、第一紙首部の下半分、第三紙の上部、更に中央部分にほぼ等間隔で九ヶ所の破損があり、紙も赤茶色に変色している、保存状態は決してよくない。その内容は、いわゆる『二入四行論』の最初である二節(二段)の「夫入道多途。」から、雑録第一の二〇節(一二三段)の「問。三世諸仏」までがあつて、以下を欠いたものである。尚土肥義和氏の連絡によれば、このS七一九九のマイクロフィルムは、同じ昭和四七年に東洋文庫に収納済ということである。

次に既整理文献でありながら、ジャイルズ氏が、“Fragments of a Buddhist catechism” (仏教問答の断片)とされ、<sup>(47)</sup>

『敦煌遺書総目索引』が「仏経疏釈」として、<sup>(48)</sup>その内容の知られなかったS一八八〇について、その表に書写された唐代の永徽(六五〇—六五六)年間の職員令を考究された池田温、岡崎誠両氏が、他写本との接続関係の精査によつて、紙背に『四行論長卷子』の残巻のあることを発見し、これを公にされた。すなわち池田温、岡崎誠両氏の「敦煌・吐魯番発見唐代法制文献」と題する論文にて、『永徽職員令』残巻についてその復元化をこころみられ、その表裏の前後関

係を图示されたのであるが、<sup>(49)</sup>そこで明らかにされたことは、従来知られたS三三七五、P四六三四と、新たに出現したS一八八〇とは、元来表が『永徽職員令』、裏が『四行論長卷子』というそれぞれ一貫した写本であったものが、後に分断されたものということである。S一八八〇の裏にある『四行論長卷子』は、表と同様二つの部分に分れ、第一部分Bは二紙三四行で、雑録第一の一七節(九段)中途から、一二四節(一六段)中途まで、第二部分Aは二紙三八行で、第一部分に続くものであり、二五節(一七段)中途から三一節(二〇段)中途までがある。そしてこれら分断された三本を復元すると、『四行論長卷子』の場合には、S三三七五、S一八八〇B、S一八八〇A、P四六三四(但しこれには前後の錯綜あり)の順(表の『永徽職員令』の場合はこの逆の順序となる)となる。

こうしてS一八八〇も『四行論長卷子』の一異本であることが明らかになり、先のジャイルズ氏の目録以降の写本であるS七一九九を加えると、現在までに漢文文献としては、写本九種、刊本一種の都合一〇種の多きを数えるに至つたのである。

先に沖本氏の「チベット訳『二入四行論』について」と題する論文によつて、『四行論長卷子』にチベット訳の存在することに触れたが、中国禅のチベットへの流入発展及びそれ

にともなう中国禅宗文献のチベット語訳の問題が、近年学会における重要な関心事となり、チベット学の方からの秀れた研究成果が次々と発表されている。今、それらの内から、『四行論長卷子』のチベット語訳について関説されている論考について紹介しておきたい。

まず昭和四八年六月「チベット仏教と新羅の金和尚」(『新羅仏教研究』所収)を発表された山口瑞鳳氏と共にこの分野での先駆的役割を果している上山大峻氏は、昭和四三年に「チベット訳楞伽師資記について」(『仏教学研究』二五・二六合併号「仏教文献の研究」所収)、昭和四六年に「敦煌出土チベット文マハエン禅師遺文」(『印度学仏教学研究』一九卷二号所収)等の論文を発表された後、昭和四九年六月に「敦煌出土チベット文禅資料の研究——P. tib. 116 とその問題点——」(『仏教文化研究所紀要』一三集所収)を発表され、その中の「はじめに」と題する序文の中で、すでに上山氏が紹介した『楞伽師資記』のチベット訳の存在を述べたのに続いて、「禅の文献と見做しうる写本の数は少くとも二〇〇点以上にのぼる」(二頁)ことを示されている。しかし同じ論文の巻末註記の4では、「現在のところ漢文禅籍よりチベット訳されたことの明瞭なものは、『楞伽師資記』と『頓悟真宗金剛般若修行達彼岸法門要訣』の二点のみである。」(一〇頁)とされ、この時点ではまだ『四行論長卷子』のチベッ

ト訳の存在は知られていなかったのである。

この『四行論長卷子』のチベット訳について、最初に言及されたのは、昭和四九年五月に出された小島宏允氏の「チベットの禅宗と『歴代法宝記』」(『禅文化研究所紀要』六号所収)である。この論文は、全巻六章からなる労作であるが、その第五章「チベット文献が語るもの」の中に

#### (四) 菩提達摩多羅の語①

『二入四行論』理入説と『楞伽師資記』

#### (五) 菩提達摩多羅の語②

『二入四行論長卷子』三藏法師の語のチベット訳として『四行論長卷子』のチベット訳の問題をとりあげている。この内(四)の『二入四行論』理入説は、小島氏も述べているように、『楞伽師資記』所収の『二入四行論』理入説を記したもので、今問題の『四行論長卷子』とは直接の関係がない。従って問題は(五)の三藏法師の言葉である。

すなわち新出のP二九二三にある『四行論長卷子』雑録第二に続く部分の一〇七節(八〇段)にある

三藏法師説、妄起時無起、即是仏家法。従忘捨、乃至真如平等、入菩薩心中、皆同一法性。然惑人説六識造煩惱。

及び雑録第一、一五節(八段)にある

三藏法師言、不解時人遂法、解時法遂人。解則識撰色、迷則色撰識。不因色生識、是名不見色。

という二つの三蔵法師の言葉が、イタリアのトゥチ氏の『Minor Buddhist Texts』II (SOR. IX, 1958, Roma) で紹介されたチベット文献『カータン・デガ』(“bka’ t’an sde lha” vol. ca)の中に訳出され、それが前者は「菩提達摩多羅大師」、後者は「達摩多羅大師」の説とされていることを明らかにされている。(一六一—一六二頁)

次いで翌昭和五〇年一二月に出された「チベット伝ボダイダルマタラ禅師考」(『印度学仏教学研究』二四卷一号所収)では、チベット文献にはいわゆる禅宗の初祖はダルマではなく、ボダイダルマタラ禅師と伝えられていることを前提に、このダルマタラのチベット文資料を挙げて考察されているが、『四行論長卷子』に含まれる『安心法門』と先のP二九二三にある三蔵法師の語一篇を有する新たな資料として、同じくトゥチ氏紹介の『ルンポ・カタン』(“Blon po bkahi thang yig”)の存在を報告された。(二二九頁)

更に続けて昭和五一年三月には、「古代チベットにおける頓門派(禅宗)の流れ」(『仏教史学研究』一八卷二号所収)を出され、チベットの頓門派の内容を構成する禅として八種をあげる内の第二に、「ダルマ『二入四行論長卷子』」をあげ、ダルマの『二入四行論長卷子』にかかわる文献と内容として、三項目をあげる内、第一項は先の理入説のチベット訳の問題であるが、第二項と第三項に、

二、『安心法門』の一部および三蔵法師の語が、やはり、ダルマタラ禅師のものとして『ルンポ・カタン』と『セムテン・ミクトゥン』に引かれている。

三、『長卷子』の末部に見える淵禅師以下朗禅師までの十九人の禅師と、二に指摘した三蔵法師の語が『ルンポ・カタン』および『セムテン・ミクトゥン』の中に引用されている。

とし、これについては、昭和五〇年九月に開催された昭和五〇年度日本西蔵学会における沖本克己氏の研究発表「敦煌チベット文献における諸禅師」によることを註記している。(七四頁及び八〇頁)

一方沖本氏は昭和五一年三月に、先にも触れた「チベット訳二入四行論について」(『印度学仏教学研究』二四卷二号所収)を発表され、先行諸論文をふまえた上で、P一六とパラルルな記述を有するチベット文献に、『セムテン・ミクトゥン』(“bSam stan mig sgron”〔禅定燈明論〕・SMG.)と『ルンポ・カタン』(“Blon po bkahi thang yig”〔大臣実録〕・BKT.)を紹介された。そして『四行論長卷子』の雑録第二に多くの禅師の引用文を載せていることについて、九五節(六八段)の淵禅師以下の諸禅師の語が、より完備した形でこれら二種のチベット文献にそのまま翻訳記載されていることを指摘され、S二七一五、P二九二三、P四七九五



によって知られた漢文文献とそのチベット訳を前記二書によって対照して掲げている。そして、禅宗に関する敦煌出土のチベット文献は、チベット仏教の側面を明すにとどまらず、漢文資料を補う直接資料たり得ることを結論づけられた。(〇三九—〇四六頁)

その後昭和五年八月、小島氏によって「Pelliot. tib. no. 116 文献にみえる諸禅師の研究」(『禅文化研究紀要』八号所収)が出され、沖本氏の SMG. と BKT. による諸禅師の研究に対して、それとパラレルな記述を有する、P. tib. 116 による諸禅師の研究を發表された。これは小島氏が「あとかき」に述べているように、沖本氏の論考と重り合う結果となったのであるが、この論文でもⅢの「各禅師の検討と関連資料」の(Ⅱ)に「菩提達摩禅師」をあげて、『四行論長卷子』との関係が論述されている。(〇二二—〇二六頁)

特に沖本氏が『四行論長卷子』の題名をチベット文献から逆に類推して、これが初期禅宗の一大叢書であるところから、『二入四行論』あるいは『長卷子』というような仮題はふさわしくなく、『四行論長卷子』と密接な前記二書が依つてゐる“rgya lun chen po” (大論) あるいは“bsam stan rgya lun chen po” (禅定大論) というものと関連があるのではないか、という興味深い仮説を立てているのである。

以上極めて概括的ではあるが、チベット学の方面から『四行論長卷子』に対してなされてきた最近の研究成果の概要を述べてきた。未整理文献や紙背関係の研究を含めて、『四行論長卷子』をめぐる研究は、多くの未解決の問題をはらみつつも近年多方面にわたって多彩な展開を続けており、更に今後に期待されているのである。

注

- (1) 『続高僧伝』卷一六菩提達摩伝(大正五〇・五五一c) 参照。
- (2) 柳田聖山『初期の禅史』I (昭和四六年三月、筑摩書房) 一三二—一三三頁参照。
- (3) 『景德伝燈録』卷三〇(大正五一・四五八b—c) 参照。
- (4) 『少室六門』第三門二種入(大正四八・三六九c—三七〇a) 参照。
- (5) 鈴木大拙『燉煌出土少室逸書』(昭和一〇年六月) 一一—二二頁参照。
- (6) 鈴木大拙『校刊少室逸書及解説』(昭和一一年六月、安宅仏教文庫) 一一—三九頁参照。
- (7) 鈴木大拙『禅思想史研究第二』(昭和二四年五月、岩波書店) 一三八—一六二頁参照。
- (8) 鈴木大拙『鈴木大拙全集』卷二(昭和四三年五月、岩波書店) 一四一—一六一頁参照。
- (9) 尚、新出のS三三七五、P三〇一八、P四六三四については、拙稿『四行論長卷子と菩提達摩論』(『印度学仏教学研究』

一四卷一号、昭和四〇年一二月) 二一七―二二四頁参照。

- (10) 『二入四行論長卷子』の区分については、「節」は鈴木大拙氏の『禅思想史研究第二』により、括弧内の「段」は、柳田聖山氏の『達摩の語録』(昭和四四年三月、筑摩書房)による。以下同じ。

- (11) 『惠雲律師将来教法目錄』(大正五五・一〇八八a)。尚これについては鈴木大拙『禅思想史研究第二』(昭和二四年五月、岩波書店)三七頁、関口真大『達摩大師の研究』(昭和三二年一二月、彰国社)八頁各参照。

- (12) 鈴木大拙 前掲書一〇四―一〇五頁参照。

- (13) 宇井伯寿『禅宗史研究』(昭和一四年一二月、岩波書店)五〇頁。

- (14) 鈴木大拙 前掲書一三七頁。

- (15) 関口真大 前掲書三三六頁。

- (16) 宇井伯寿 前掲書三二頁、鈴木大拙 前掲書二一三―二一八頁、関口真大 前掲書三三三―三四四頁各参照。

- (17) 『宗鏡録』卷九七(大正四八・九三九b―c)参照。

- (18) 『宗鏡録』卷一二「初祖大師云、若一切作処即無作処、無作法即見仏。若見相時、則一切処見鬼。」(大正四八・四八二a)。

- (19) 『宗鏡録』卷七八「達磨大師云、由己見故不得道。己者我也。」(大正四八・八四八a)。

- (20) 『百丈大智禪師広語』は、宇井伯寿氏がその著『第二禅宗史研究』(昭和一六年一二月、岩波書店)三九六―四二三頁に校定本を掲げているが、次の三ヶ所に「此土初祖云」の引用がある。括弧内の頁数は宇井氏の『第二禅宗史研究』の該当頁を示す。

此土初祖云、無能無所聖為<sub>レ</sub>仏聖。(四〇二頁)

此土初祖云、心有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>是必有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>非。(四一三頁)

此土初祖云、心心如<sub>レ</sub>木石。(四一九頁)

- (21) 鈴木大拙 前掲書一二二頁参照。但し鈴木氏は「心心如<sub>レ</sub>木石」の引用を雑録第一の二八節と三〇節に相当するとされるが、三〇節は「心如<sub>レ</sub>石頭。」とあって「木石」ではない。むしろ五八節に「若心如<sub>レ</sub>木石」とあり、二八節と五八節とすべきであろう。鈴木大拙前掲書一四五頁、一五〇頁各参照。

- (22) 柳田聖山『初期の禅史』I(昭和四六年三月、筑摩書房)一三七頁。

- (23) 柳田聖山『初期禅宗史書の研究』(昭和四二年五月、法蔵館)四八八頁。

- (24) 常盤義伸・柳田聖山『絶観論』(昭和五一年九月、禅文化研究所)図版二頁。

- (25) 鈴木大拙 前掲書一一八頁参照。

- (26) 宇井伯寿『禅宗史研究』(昭和一四年一二月、岩波書店)五〇頁参照。

- (27) 中川孝「菩提達磨の研究―四行論長卷子を中心として」(『文化』二〇卷四号、昭和三一年七月)六二七―六三八頁参照。

- (28) 『続高僧伝』卷一六、釈僧可伝(大正五〇・五五二a―b)参照。

- (29) 『宗鏡録』卷三二(大正四八・六〇三b)参照。

- (30) 関口真大 前掲書三二二―三二五頁参照。

- (31) 柳田聖山『達摩の語録』(昭和四四年三月、筑摩書房)五六頁参照。

- (32) 関口真大 前掲書三三八―三四四頁参照。

(33) 『宗鏡録』卷九九(大正四八・九五〇c)参照。

(34) 柳田聖山「伝法宝紀とその作者―ペリオ三三五九号文書をめぐる北宗禅研究資料の札記、その一―」(『禅学研究』五三号、昭和三八年七月)六〇頁参照。

(35) 『宗鏡録』卷九九(大正四八・九五〇c)では「大乘入道安心法、云」といい『註心賦』卷四(統藏二・一六・一・七四c)では「大乘入道安心論、云」といって、出典名に若干の相違があるが、引用文は共に「若以有是、為是有所不是。若以無是、為則無所不是。」である。

(36) 柳田聖山「北宗禅の一資料」(『印度学仏教学研究』一九卷二号、昭和四六年三月)一二七頁参照。

(37) 梵禅師、円寂尼、慧堯師(堯禅師)の言は『宗鏡録』卷九七(大正四八・九四一b)に、可禅師(第二祖可大師)の言は同じく卷九七(大正四八・九三九c―九四〇a)に、三藏法師の言は卷一〇〇(大正四八・九五三a)にある。

(38) 『続高僧伝』卷一一知梵伝(大正五〇・五一一a―b)参照。

(39) 拙稿「四行論長卷子雜録の一異本」(『宗学研究』一三号、昭和四六年三月)四〇頁参照。

(40) 沖本克己「チベット訳『二入四行論』について」(『印度学仏教学研究』二四卷二〇号、昭和五一年三月)〇四〇頁参照。

(41) 『続高僧伝』卷一七釈慧命伝の附見の「時又有沙門慧暁。」以下(大正五〇・五六二b―c)参照。

(42) 柳田聖山『初期の禅史』I(昭和四六年三月、筑摩書房)一七三―一七四頁参照。

(43) 『宗鏡録』卷九七(大正四八・九四一b)。

『二入四行論長卷子』(擬) 研究覚え書(田 中)

(44) 鈴木大拙 前掲書一五五頁、柳田聖山『達摩の語録』(昭和四四年三月、筑摩書房)二〇九頁。

(45) L. Giles: *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum.* (1957. London)

(46) 拙稿「イギリス・フランス留学記」(『駒沢大学仏教学部論集』三号、昭和四七年一二月)一五九―一六〇頁参照。

(47) L. Giles: *ibid.* p. 274 *cf.*

(48) 商務印書館『敦煌遺書総目索引』(一九六二、北京)一四六頁参照。

(49) 池田温、岡崎誠「敦煌・吐魯番発見唐代法制文獻」(『法制史研究』二七号、昭和五三年三月)一八九―二二九頁、特に表裏関係の図示は二二―二二三頁参照。